

速度を落とす教会改革

法王フランチェスコは法王就任以来、ヴァチカン議会、教会、銀行等のあらゆる改革に手を出してきたが、内部抵抗が厳しくなかなか進展しなかった。そこへ、就任以降、アフリカから大量の難民が押し寄せるようになり、その受け入れ態勢に多くの時間を捧げねばならなくなった。

昨年12月21日、法王はクリスマスを前にして、枢機卿や司教を集めて時の挨拶をしたが、その内容は主にヴァチカン内部の機構改革と難民の受け入れ態勢についてであった。

まずは機構改革から始まった。「ローマ聖庁は古典的機関であり、その機構は複雑をきわめている。その改革には忍耐と慎重さが必要だ。たとえば、エジプトのスフィンクスを歯ブラシで綺麗にするようなものだ。」ここで枢機卿や司教は大爆笑する。法王は改革反対派を直接攻撃しなかった。「聖庁は神の『宇宙性』、神の僕としての『ローマ司教の助祭性』に結びついている。」つまり「ローマ司教の役割は国と国との間に橋をかけることであり、他宗教と対話を進めることである。」「そうしなければ、聖庁は存在価値を失い、自滅への道を歩んで行く。」「それを避けるために、大局に立たなければならない。それをしないのは、聖庁のガンになる。さらには教会の母性の利用者であり、裏切りものである。」「一人ひとりが我がこととして教会改革に手を染める必要がある。」「最後に皆さんに許しを請い、謝らねばならない、司教の動物的集団であってはならない、我々は善例を示していかなければならない、ヴァチカン内には黒い仕事はいらないのだ。」

この法王の話が終わった後、多くの枢機卿、司教は三々五々に散って行ったが、話の印象を語ったものもある。「やっと法王も聖庁を尊ぶようになった。聖庁改革でいかに手を染めていくのが悪いかわかったようだ。」「改革は不可能」というものだ。

ここ3～4年、アフリカやシリアから多くの難民がゴムボートに乗って、新天地を求めて地中海を渡って来ている。イタリアはアフリカのリビアと目と鼻の間の距離だ。いくら地中海が静かな海だと言っても、ゴムボートでは堪えられないような波もある。そういう時にはゴムボートはひっくり返り、多くの難民が海に投げ出され命を落とす。イタリアは人道上の支援から、その人たちを助け、ランペドゥーザにある難民収容所に入れて手厚く扱っている。

そこで法王はヨーロッパの多くの教会、修道院で難民を受け入れるように訴えているが、あまり効果が上がっていないようだ。そのために、法王はローマに本部のある在家集団の聖エジディオ共同体に難民を受け入れるように依頼し、共同体が多くの難民を預かっている。こういう状況から、法王はイタリアの各都市の市長たちにも、門戸を開き、難民を受け入れるように話を進めている。特に昨年9月30日の法王の一般謁見の日にイタリアの各地の市長200人が出席した。その市長たちに「難しいことは分っている。市民の感情も分る。それを乗り越えて貧民同様に難民を扱ってくれればいいと思っている。難民は難民たちだけでは生活できないのだ。」と訴えた。

中国訪問を見据える法王

世界で最多の人口を抱え、世界第2の経済大国と発展した

中国は、1949年に毛沢東の勝利によって、共産主義国になるや宗教を否定した。そこで、ヴァチカンと中国との外交関係は1951年に途切れた。その中国には、中国人のキリスト教信者が多数いる。その信者たちにヴァチカンは目を向け、信者保護に向かって、中国と外交関係を樹立しようとしている。共産主義の中国においても、民衆の宗教活動はまったくなくなったのではない。近年、その宗教活動は活発化させているようだ。北京政府はヴァチカンの法王の権利を奪い、中国内のキリスト教の司教を任命している。国土も広く人口の多い中国には数千万人のキリスト教信者がいるとさえ言われている。

昨年中国では「人民大会」が開かれ、習近平氏の独裁体制が整備されつつあるが、その中で国がもう少し開かれ、人道主義が進み、宗教の自由も緩和されるだろうという望みが高まっている。

今年3月には北京の紫禁城で、ヴァチカン所有の40点の中国芸術の作品が里帰りし、展覧会を開くことが決定された。同時に、中国は40点の中国の芸術作品をヴァチカンに貸し出し、展示されることになった。とは言い、ヴァチカンと中国政府との間には未だ大きな隔りがあることには変わらない。

ヴァチカンは中国との関係の修復を早いうちから考えている。その具体的な行動として、2014年に法王は韓国を訪問したが、その時に法王の乗った飛行機が中国上空を通過する許可を得るために何回かの交渉の場が設けられた。さらに法王は、フィリピンやスリランカ、インドネシアを訪問、旧年末にはミャンマーとバングラデシュを訪問している。今年はインドを訪問するという。つまり、法王のアジア訪問は中国の周辺国家ばかりだ。ヴァチカン側から見ると、法王の中国訪問は、いつ実現してもおかしくないという。

中国訪問に関して法王は次のように述べている。「中国訪問については、まだ何も準備されていない。私にとって、中国に行くということはまったくの夢で、それは隠すことではない。北京との関係は文化や科学、外交であり、特に宗教的なものでもある。非合法的宗教的なものを改正するために、少しずつ対面して行く必要がある。ともあれ、忍耐が必要であり、心の扉は開いておく必要がある。中国への旅は皆にとって良いことだと信じている。」

ローマ法王は昨年10月末、30人の中国宗教者を迎え「あなた方の喜ばしい訪問に答えるために、早いうちに返礼のために貴国を訪問したい。」と述べている。「早いうち」と言っても、ヴァチカンも中国も、時間的には長くかかると考えているようだ。法王は、物事はゆっくりやった方がいい結果が出ると言っている。現在のヴァチカンと中国政府との関係は、細く長くだろう。法王はアルゼンチン人。中国は近代ヨーロッパの侵入を受け、植民地化され、経済的にも混迷をきわめた。そのために、ヨーロッパ人に対する警戒心が解消した訳ではない。しかし、アルゼンチン人の現法王に対する猜疑心は皆無と言ってもいいだろう。

中国の外交関係再樹立の前に立ちちはだかる問題として、ヴァチカンが台湾と外交関係を維持しているという点がある。世界の国々は二つの中国を認めていない。一つの中国（大陸）との外交関係を樹立し、台湾政府を認めない。しかし、台湾が外交関係を維持しているのは、ずっとヴァチカンなのである。